

2024年度入試

【和文】

次の文章（参考文献も含む）を読んで、問いに答えなさい。

出典は、東北大学の沼崎一郎教授が、弘前大学で開催された日本文化人類学会第52回研究大会（2018/06/02 - 2018/06/03）の分科会8「オートエスノグラフィーの可能性」の為にあらわした「オートエスノグラフィーの可能性－研究と生活の人類学的往復を通して」であるが、脚注を追加するなど若干の変更を加えた。

本分科会の目的は、研究技法としてだけでなく、生活技法として、特に「多文化」を生きる技法としてのオートエスノグラフィーの可能性を探ることである。

オートエスノグラフィーは、「深く綿密な自己省察 - 概して『再帰性』と呼ばれる - を用いて、自己と社会、個別と一般、個人的なことと政治的なこととの間の交差点を名付けかつ審問する」ことにより、「何をし、どのように生きればよいかを見出す闘いの渦中にある人々と、その闘いの意味とを描き出す」（Adams, Jones, and Ellis 2015: 2）。「一人称で語る『私』の存在が全面的に登場する」オートエスノグラフィーの目指すものは「自分の経験を振り返り、『私』がどのように、なぜ、何を感じたかと言うことを探ることを通して、文化的・社会的文脈の理解を深めること」である（井本 2013:104）。

オートエスノグラフィーは、概して人類学¹の外部、主に社会学やコミュニケーション論、教育学の分野で発展してきた。

しかしながら、人類学においても、たとえばロバート・マーフィの『ボディ・サイレント』（マーフィ 2006）は、自身の不治の病と身体不自由化を主要な研究対象としつつ、アメリカ社会という文脈において、身体障害者²をめぐる文化を問い直そうとしたオートエスノグラフィーと見なせる研究が行われている。日本でも、たとえば鈴木裕之の『恋する文化人類学者』（鈴木 2015）は、オートエスノグラフィックな異文化研究と呼べる。少数ではあるが、「一人称で語る『私』」を中心に据えた民族誌³は、人類学者によっても生み出されているのである。

そして、このような人類学者による自分自身の対象化は、人類学における「再帰的/反省的転回（The Reflexive Turn）」（Levi n.d.）の要求に応える一つの方法ではないだろうか。

¹ 人類学＝「生物としてのヒト」を総合的に研究する学問。

² 障害者＝しょうがいしゃ

³ 民族誌＝エスノグラフィー。フィールドワーク（現地調査）に基づいた人間社会の現象の質的説明。

2024年度入試

アメリカの人類学者ヘザー・レヴィによると、いわゆる「反省的転回」は、人類学の3つの学問的危機を反映している (Levi n.d.)。第1に、1970年代初頭以来の人類学と植民地主義⁴の共謀関係への反省と批判である。第2に、人類学における男性中心主義に対するフェミニズムからの批判である。フェミニストは、ジェンダーの視点から、人類学者の立場性が如何に人類学的認識を規定しているかを鋭く問うた。第3に、民族誌的「主体」の問題性である。レヴィは、その出発点を 1967年のマリノウスキー日記の出版に見出している。日記が明らかにしたマリノウスキーの赤裸々な告白は、トロブリアンド島民に対する彼の「視線 (gaze)」と、彼の生み出した民族誌の「権威 (authority)」に対して大いなる疑問を抱かせるものとなった。そして、1986年にジェイムズ・クリフォードらの『文化を書く』(クリフォード 1996)が出版されて以来、人類学者と調査対象者との間の不平等で権力的な関係性が鋭く問われ、著者である人類学者が不可視化される一方で調査対象者の文化が「客観的」に描写されるという従来の民族誌的な異文化の叙述スタイルの戦略性と政治性が議論の俎上に載せられている。

オートエスノグラフィーは、最も先鋭的な形で民族誌の著者である人類学者を可視化しようという試みである。とするならば、「『文化を書く』ショック (The Writing Culture Shock)」を真摯に受け止めて人類学を問い直す営みの一環として、オートエスノグラフィーはもっと試みられてもよいのではないだろうか。

このような問題意識から、本分科会の発表者は、それぞれの人生と人類学的営為とを往復しつつ、オートエスノグラフィーの可能性を探る。

参考文献

Adams, Tony E., Jones, Stacy H., and Ellis Carolyn 2015 *Autoethnography*, Oxford and New York: Oxford University Press.

クリフォード, ジェイムズ・マーカス, ジョージ 1996 『文化を書く』(春日春樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇子訳) 紀伊國屋書店。

井本由紀 2013 「オートエスノグラフィー—調査者が自己を調査する」藤田結子・北村文(編)『ワードマップ現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社, 104-111頁。

Levi, Heather

n.d. “Reflexivity-Reflexivity in Anthropology.” <http://science.jrank.org/pages/11001/Reflexivity-Reflexivity-in-Anthropology.htm> (2017年4月29日参照)

マーフィ, ロバート E. 2006 『ボディ・サイレント』(辻真一訳) 平凡社ライブラリー。

鈴木裕之 2015 『恋する文化人類学者—結婚を通して異文化を理解する』世界思想社。

⁴ 植民地主義=多様性を認めず、均一化、同一化したカテゴリーに閉じ込め、植民者側の基準で被植民地や被植民者を劣ったものとしてレッテルを貼り、経済的に搾取したり文化的に支配したりすることを正当化し実践すること。例えば日本も台湾(1895-1945)や朝鮮(1910-1945)などを植民地にしていた。人類学の中にも人々の多様性を消しカテゴリー化することで植民地主義にくみしてしまった研究があり、反省し乗り越える必要がある。